World of Fantasy

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａｓｙ

【Ｎコード】

Ｎ３５０３Ｕ

【作者名】

Ｋ＿Ｓａｙｕｔｏ

【あらすじ】

リアルとゲームと過去と現在の交差する物語。果たしてこの物語の裏では何が起きているのか。

プロローグ

?俺は伊志井（いしい）　将（しょう）。今大変な事態が起きている、ただの悪ふざけでした事がこんな大変な事になるなんて誰が思っただろう。俺は今混乱している。いや、混乱しないはずがない。何故なら、ここはゲームの中なのだから。あれはだいたい一週間位前だろうか。

そうだ、確かあの日は寝坊してチャリにぶつかって電車に乗り遅れて財布を落として学校に遅刻して友達にあった事から始った。もしかしたらその時からこの物語は始っていたのかもしれない。

登場人物

伊志井（いしい）　将（しょう）

？高校一年生、桂峰の親友。Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａｓｙ内では名前はショウで始め見習い魔法士となる。同じクラスの阿久津（あくつ）　玲奈（れな）が気になっている。

？桂峰（かつらみね）　神紅（しんく）

？高校一年生、伊志井の親友。Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａｓｙ内では名前はかみにゃんで始め見習い戦士となる。

伊志井（いしい）　鑿（さく）

将の兄、昔将と何かあったようでたまにギクシャクした関係になる。

？佐藤（さとう）　勇季（ゆうき）

？高校一年生、伊志井の友達。Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａｓｙ内では名前はユーキで再開した時はマジックナイトだった。

？阿久津（あくつ）　玲奈（れな）

？高校一年生、伊志井のクラスメート。Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａｓｙ内では名前はレーナで始め見習い魔法士となる。

白木（しらき）　剣（けん）

？高校の先生、伊志井の担任。Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａｓｙ内では名前はソードで始め見習い戦士となる。

黒木（くろき）　盾（じゅん）

高校の先生、高校一年生の主任。Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａ

ｓｙ内では名前はシールドで始め見習い戦士となる。

神崎（かんざき）　優衣（ゆい）

服部（はっとり）　光一（こういち）

刃雷（じんらい）　真（まこと）

宮城（みやしろ）　葵（あおい）

金田（かねだ）　武士（たけし）

アイク

クリス

スピア

ジスト

フローラ

フィリス

レイ

フィズ

？

？？

第一章　噂

?ある日俺は幼稚園時代からの友達、かみにゃん本名は桂峰（かつらみね）　神紅（しんく）がこんな事を言っていた。
?「ねぇ、知ってるあの噂?」
?「俺はそういうのに疎いって前から言ってるじゃん」
?そう、俺はものすごく疎い何故ならＴＶがないからだ。
?「実はさ今全国で行方不明者が多発してるって話し。そいで、みんなあるオンラインゲームをやっていたらしいんだ」
?そんな事が起きてるのかぁと俺は他人事のように考えてた。
?「オンラインゲームの事ならユーキに聞いてみるか」
?ユーキとは小学校時代の友達で本名は佐藤（さとう）　勇季（ゆうき）
オンラインゲームで知らないものはないほどのゲーマーだ。いつも「あのＭＭＯは無駄な要素が多すぎるとか、ＡＧＩとＳＴＲがあればあのボスは結構楽に倒せる」など言っている。
?「は～い、出席と～りま～すよ～」
?とケン本名は白木（しらき）　剣（けん）先生が入ってきた。この先生も相当ゲーマーでＭＯＯンで大抵の敵は４分で倒せるという伝説がある。
?「伊志井」
?「はい」
?「桂峰」
?「ふぁーい」
?「小峰」
?「うぃっす」
?「佐藤・・は風邪で休みです」
?「佐和田」
??　?　?　?　?　?　?以下略
?そして、国語やら数学やらを当たらないことを点に祈りながら放課後になり俺はかみにゃんとユーキの家へ行った。だがそこで驚き

の真実を聞いた。
?「えぇ、ユーキが行方不明だって?」
?「お、おばちゃんユーキの部屋見せてくれる?」
?「ええ、いいわよ」
?俺とかみにゃんはユーキの部屋に走って入った。
?まさか、ユーキが行方不明だって、もしかしてあの噂のように。
?俺は焦った。
?「ショウ、これだ」
?かみにゃんはパソコンを示していた。
?「これは、そうだユーキが最近Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｆａｎｔａｓｙってのにはまってるって言ってた。警察に連絡いや運営に連絡、ああもうどうすりゃいいんだ」
?「ショウ、俺たちもこのゲームをやるんだ、そうすればユーキがどこにいるかわかるかもしれない」
?「でも、単なる噂だろ。大体悪ふざけでもし本当に俺たちも・・・・」
?「そんなこと言ってる場合じゃないよ、ユーキの命がかかってるかもしれないんだ。俺たちが助けにいかないと」
?怖い、でも・・・・それ以前にユーキを助けたい気持ちだって大きい。どうすりゃいいんだよ・・・・・・いや、どうするかなんて考える必要なんてなかったかもしれない。だって、かけがえのない友達を助けるのは当たり前のことじゃないか。
?「わかった、かみにゃんじゃあ今日帰ってすぐダウンロードしてやってみるよ」
?「わかった、とにかく入ったらすぐ電話して」
?「分かった」
?俺は走った、全速力で。
?

第二章　鑿

?その夜、俺とかみにゃんはゲームをやって見た。
?「あーショウいたー」
?「おお、かみにゃんやっと会えた」
?やばいこれおもろすぎる。と俺は本来の目的を忘れていた。
?「ショウダンジョン行こう」
?「おお、やっぱダンジョンもリアルなのかなぁ」
?そんなたわいもない話をしながらダンジョンへと入って行った。
?「くらえー」
?「いけいけー」
?「これおもろすぎるって、ん?」
?「どうしたショウ?」
?なんだこれ?アンケートか?
?「なんかアンケートが来た」
?「あ、俺も来た」
?ええと内容は、このゲームは面白いですか?もちろん。もしこんな世界があったとしたらあなたは行くゆうきがありますか?
俺はＹＥＳにキーを合わせマウスを押した、それから何があったかは覚えていない。

?「あれ、ここはどこだ」
?そこには見慣れた俺の部屋はなく薄暗い建物の中だった、さっきまで握ってたマウスの代わりにあるのは一本の杖、目の前にパソコンの姿は無く代わりに一匹の魔物がいた。
?「うわ～、助けて～」
?俺は杖で思いっきり殴った、するとクリティカルだったのか効果音とともに敵は吹っ飛んで行った。
?「な、なんだよここ」

?「あれ、ショウ？」
?不意にかみにゃんの声が聞こえた。
?「どうしてかみにゃんもここにいるんだ」
?「わ、わかんない。でもこれが行方不明の謎かもしれない」
?「どういうこと」
?俺はまだ何も気がつかなかった。
?「ここってゲームの世界なんじゃないか？みんなこの世界に飛ばされて行方不明になったんだと俺は思う」
?確かにそうかもしれない、俺がもっている杖も装備していたエレメントワンドだ。
?「どうしよう、そうだ。ユーキを探さないと」
?「ショウとりあえずここを出よう、まずは安全地帯に行かないと」
?「そうだね、出口は・・・あっちだ」
?俺たちは全速力で走った。あるものと遭遇するまでは。

?俺は伊志井（いしい）　鑿（さく）ショウの兄だ、借りてた漫画を返そうとショウの部屋に入ったらショウは居なかった。
?「あれ、便所か？ここにおいとくぞ」
?俺はそのまま部屋から出ようと思ったがパソコンの画面をみた瞬間。
?「これは、オンラインゲームか・・・・・まさかこれは行方不明者の共通点の」
?まさかショウも巻き込まれたのか。だけど、原因が分かればなんとかなるかも知れない。とりあえず運営に問い詰めてみよう。

裏話

雪刹：皆さんごくろーさまでしたー。
ショウ&かみにゃん：え？なにここ。
雪刹：ああ、もういろいろと自由に話しちゃおうってページだよ。
ショウ：じゃあ、言わせてもらおう。何かってに俺の兄作ってんだよ。
雪刹：そんな設定の方がいいかなぁと思って。
かみにゃん：俺のことなんだが著作権違反なんじゃないか？
雪刹：大丈夫、作者友達で許可とってるから。
かみにゃん：ならいいんだけど、これウケ取ろうと思ってやってる？めっちゃつまんないよ。
雪刹：ええ、俺的にいいかなぁと思ったんだけど。
ショウ：お前はとっとと続き書いて早くその・・・・玲奈さんだしてよ。
雪刹：はーい、わかった。がんばりますよー。（棒
ショウ：いっぺん死ね［スペル：ファイア（Ｌｖ１）］
雪刹：あっつぅぅぅぅぅ。わかったもうでないよ。最後に一言何か要望聞きたいことなどあったら「ｓｅｓｓｅｔｕ@ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ」までニックネームも添えてメールをお願いします♪（ｖ^―^）ｖ

第三章　再会

?なんだよこれ、何か人型のものが出口の前で仁王立ちしている。そいつは手にもっている棍棒を振り回して俺たちをなぎ払った。
?「なんだこいつ、うわ俺もうＨＰ３だよ、ええと魔法の発動方法は・・・・こうだ。［スペル：ヒール（Ｌｖ１）］よかった回復した。神にゃんは大丈夫？」
?「うん、ええいこいつめ［スキル：パワーヒット（Ｌｖ１）］くらえぇぇぇぇ」
?だが、ダメージは５だけだった。
?「なにそれー、ゲームバランスおかし過ぎ」
?「ええい、［スペル：ファイア（Ｌｖ１）］」
?だがこちらもダメージは４。どうしようもない俺は諦めた、その時。
?「［スキル：ダブルブレイク（Ｌｖ３）」
?一人の青年が二回連続斬りを放ちどちらもダメージ３１で合計６２。それでやっと一割削れた。
?「君たち、はやく逃げるんだここは俺が抑えとく」？
?あれ？この声何処かで・・・・・・・・まさか。
?「ユーキ、ユーキなのか？」
?「えっ、ショウ、かみにゃんもどうしてここに」
?「俺はショウと一緒にお前を助けに来たんだよ」
?「かみにゃん、まずはこいつを倒すぞ。ショウ、お前サーチ使えるか？」
?「やってみる［スペル：サーチ（Ｌｖ１）］・・・・・・わかった、こいつの弱点は雷属性だ」
?「よし、［スペルソード：サンダー（Ｌｖ１）］」
?「［スペル：サンダー（Ｌｖ１）］」
?「［スキル：パワーヒット（Ｌｖ２）」

?三人の総攻撃により敵のＨＰは０になった。
?「あ、新たなジョブが出て来た、サムライだ」
?「へー、それユニークジョブだよ。ショウはなんか出た？」
?「ええと、ヒーラーとドルイドが出た。うーん、とりあえず俺はヒーラー選んどこう」

?そして、始まりの街「ワーズ」についた。
?「まずは装備揃えよう、日本刀とかあるかな」
?「俺はスタッフが欲い」
?だが相場が馬鹿げていた。
?「・・・・・ナゼ木の棒にしか見えないものが１０００００００００００００もするんだ」
?おかしい、おかしすぎる。誰がそんなものを買うかよ。
?「いや、だってこれ・・・・本当にすごいよ。マナ５００増加、スペル攻撃力３００増加、マナ消費１／１０、［ユニークスペル：サモンディスドラゴン（Ｌｖ８）］使用可、［ユニークジョブ：ドラゴンマジシャン］転職可、世界に１本だけって言う超伝説級最強完全無欠チート武器だしさ」
?「どんだけーーーー」
?俺とかみにゃんは叫んだ。
?「あ、そうそう。確かレベルにも制限があって確かＬｖ９００以上だったかな」
?「なんだそりゃー」

?
?と俺とかみにゃんが叫んでいた時に。
?「うるさいなぁ、こんなに叫んでどんなバカたちかしら。顔でも拝んでいくか」
?と一人の少女が言っている。その人はジョブは見習い魔法士、名

前はレーナ。そして、そのバカたちをみた時に。

？「あれ、ユウくん、ショウくん、シンクくん。どうしてここに」

？「ふぇ？・・・・・玲奈さんどうしてここに」

？

第四章　剣と盾

俺は白木　剣、この世界での名はソードで今はまだ見習い戦士だ。だいたいの状況は理解出来た。つまり、俺はシールドこと黒木　盾と共にこの世界を救うてきな事をすれば現実世界に戻れるというパターンだろう。燃えてきた。

「なぁ、ソード。俺たち何処にいるんだ？」
「何処かと言われても、分からん、とにかく町に行って装備揃えて、食糧かって、寝るか」
「寝るんかいっっっ、さっきのやる気は何処行った」
「わかってるって、にしても」
おかしい、おかしすぎる。
「どうした？」
「なんで二人とも同じジョブなんだよ、バランス悪っ」
こうして、俺とシールドとのもう一つの旅が始まった。

「って、この章終わりみたいな言い方するな。まだ続くぞ」
とシールドは言う。
「あ、そーなの？」
と言うと、シールドは呆れたように歩き出した。
何故か一回も敵とは遭遇せずに街へついた、だが。
「なんだよ、これ」
ソードは無意識につぶやいてしまった。

いま目の前に広がる光景は紛れもない事実。それはモンスターに襲われている焼けた村だ、他のゲームに例えるとしたらアークデーモンやガーゴイル、おまけにドラゴンみたいな物までいる。つまりこれは・・・・・そう、虐殺だ。

「酷い・・・」

シールドもそう呟いて何かを見つけた様だった、それはモンスターに追われている少女だった。

俺とシールドは考える前に行動を起こし、少女とモンスターの間に割り込んだ。

「逃げてください、こんなやつに叶うわけありません」

少女はそう叫んでいたが、俺たちが逃げたら少女は殺やられてしまうから引くわけにはいかなかった。

そしてそれが俺たちの始めての戦いだった。

「ソード、俺がやつの攻撃を防ぐ。お前が攻撃しろ」

そんな事を言っているがＬｖ１で抑えられるわけがない。

「ダメだ、二人でうまく戦えば勝てるはずだ。お前を盾にする事はできないっ」

「わかった、よしスイッチを使おう」

「わかった、シールドお前が先に攻撃してくれ」

俺がそういうと、シールドはやつに切りかかった。クリティカルが発動したがダメージは１だった。でも俺たちのコンビネーションでそれは補た。戦闘時間４０分、攻撃ヒット数２５８０、スイッチをうまく使う事により俺たちはノーダメージで切り抜ける事が出来た。そしてＬｖが１から２０まで上がった。

「ありがとうございました」

少女はお礼を言った、だが。

「俺たちは君しか守れなかった、この世界を救うとか意気込んで置いて村一つロクに守れなかった、俺はただの無力な人間だ・・・」

「ソード・・・」
少し沈黙が続いたが、それを破ったのは少女だった。
「無力なんかじゃありません、私はあなたに助けられました。それだけでも十分です。それに力がないなら強くなればいいんです。そうすればいつか必ず世界を守れます、私もこの力をあなたたちのために使います、私の名前はフィリス・ラクティシアです、フィリアと呼んでください」

そして、ショウ達とは違うところで新たな主人公が生まれた。彼らの名前はソード、シールド、フィリス、3人の力はまだまだ未熟だけど、いつか必ず強く、そしてたくましく。

職業紹介

見習い戦士
　初期職業の１つ、筋力・防御・体力に特化している。主に近接武器ならなんでも装備可能。

見習い弓師
　初期職業の１つ、視力・きようさ・敏捷力に特化している。主に弓を使う。

見習い魔法士
　初期職業の１つ、魔力・知識・敏捷力に特化している。主に杖・ロッド・その他軽い物を使う。

ナイト
　見習い戦士をマスターすると出現する。見習い戦士の能力のうち防御と体力を大幅に上げて筋力を少し上げた物。主に剣を使う。

ランサー
　見習い戦士をマスターした時に運がよければ出るユニークジョブ。ナイトより防御と体力は下がるが攻撃力と敏捷力は大幅に上がる。主にランスを使う。

魔法使い
　見習い魔法士をマスターすると出現する。見習い魔法士の能力を全体的に底上げした物。主に杖・ロッド・その他軽い物を使う。

ヒーラー
　見習い魔法士をマスターした時に出現する。魔法使いとは違い回

復魔法に特化している。主に杖を使う。

マジックナイト
　魔法使いとナイトをマスターすると出現する。魔法使いとナイトの特化している物を少しずつ底上げした物。主に剣・ロッドを使う。

アーチャー
　見習い弓師をマスターすると出現する。見習い弓師の能力を全体的に底上げした物。主に弓を使う。

ガンナー
　アーチャーをマスターした時に運がよければ出るユニークジョブ。主な武器は銃。

グラディエーター
　ナイトをマスターした時に出現する。ナイトから攻撃特化にうつったジョブ。主に剣を使う。

チェイサー
　出現条件不明。あまり戦闘には向かずハイド・敏捷力・視力・聴力に特化している。基本武器は持たない。

アサシン
　チェイサーをマスターすると出現する。チェイサーの時より攻撃力が大幅に上がる。主にダガーを使う。

スナイパー
　ガンナーとアサシンをマスターすると出現する。遠距離からの一撃が協力で熟練者でもジョブによっては一撃で倒す事が可能。主な

武器は銃と弓。

パラディン
　ナイトとヒーラーとディフェンダーをマスターした時に運がよければ出るユニークジョブ。全てのステータスが高く特に防御と攻撃力が高い。武器ならなんでも使える。

ダークナイト
　グラディエーターとスナイパーと魔法使いをマスターした時に運がよければ出るユニークジョブ。全てのステータスが高く特に攻撃力が異常に高い。

賢者
　魔法使いとヒーラーとサモナーをマスターすると出現する。魔法系統のエキスパート。基本武器はなんでも装備可能。

サモナー
　ドラゴンテイマーと魔法使いをマスターした時に運がよければ出るユニークジョブ。モンスターやドラゴン、天使までも召喚する事ができる。基本武器は持たない。

アルケミスト
　サモナーと賢者とガンナーとブレイカーをマスターした時に運がよければ出るユニークジョブ。ゴミからでも優れた武器を作る事が可能で鉱物があれば等級に応じた強い武器を作る事が可能。主に武器はなんでも使える。

マジックアーチャー
　アーチャーとマジックナイトをマスターした時に運がよければ出

るユニークジョブ。矢に魔力を込めて撃つ事ができる、銃でもにたような事ができる。主な武器は弓と銃。

ブレイバー
　出現条件不明。簡単に言えば勇者。それ以外の事は不明。

トランサー
　出現条件不明。主に変身をして戦う。武器は持たない。

ディスペラー
　出現条件不明。魔法系統の物を全て解除・破壊する事ができる。武器はなんでも装備可能。

風水士
　全てにおいて不明。羅針盤を使う事のみ知られている。

吟遊詩人
　出現条件不明。主に楽器を使い魔法演奏をする。主に楽器とダガーを使う。

バトルマスター
　出現条件不明。近接のエキスパートで近接に必要なステータスは攻撃力以外Ｎｏ．１。近接武器ならなんでも使える。

サムライ
　出現条件不明。１人だけ使う事のできるハイパーユニークジョブ。攻撃力だけならＮｏ．１主に刀を使う。

ビーストテイマー
　出現条件不明。動物を手なずけて仲間にする事ができる。主な武

器はムチと杖。

フェアリーテイマー
　ビーストテイマーをマスターすると出現する。妖精を武器に宿して戦う。武器はなんでも装備可能。

ドラゴンテイマー
　フェアリーテイマーをマスターすると出現する。ドラゴンまでも手なずける事が出来る。主な武器はなんでも装備可能。

フェンサー
　出現条件不明。敏捷力が異常に高い。主な武器は細剣。

ナイトメア
　全てにおいて不明。

ディフェンダー
　出現条件不明。防御にかんしてはＮｏ．１。盾を武器にする事ができる。主な武器は盾２つ。

ストライカー
　出現条件不明。攻撃力にかんしてＮｏ．１。二鈍流が可能。主な武器は鈍器。

ブレイカー
　全てにおいて不明。

第五章　竜の遠吠え

「白馬に乗った王子様・・・、なんて物は夢のまた夢」
私は阿久津玲奈、この世界ではレーナという名前です。とある事によりこの世界にきてしまい、クラスメイトのある男子が白馬に乗って助けにきてくれないかな～、と思っていたところ白馬はいなかったがその男子が来た。そう、ショウくんだ。さっき叫んでいたところ合流していろいろと状況を確認し合いともに行く事に決めた。まぁ、どの道ついて行こうとは思ってたけど・・・。
現在これからどうするかが話し合われている。
「だからさ、自分の身を守れるぐらいに強くなろうよ」
とショウくん。
「いやいや、まずは準備からでしょ。積み木だってしたの台が安定してなかったら崩れちゃうじゃん」
とシンクくん。
「まぁ、今ある金で揃えられる物は揃えた方がいいだろ」
とユウくんの言葉で結局装備を買い揃える事にした。
もともとユウくんがドロップ品など沢山あったお陰で一通り揃った。

装備紹介
名前
右手武器／左手武器
右手補助武器／左手補助武器
頭／服
靴／腕
アクセサリー／その他
ショウ

エレメントワンド／無し
短剣／無し
皮の帽子／ローブ
皮の靴／皮の腕輪
無し／無し

かみにゃん
ショートソード／バックラー
短剣／短剣
アイアンヘルム／アイアンメイル
アイアングリーブ／ガントレット
無し／無し

ユーキ
ブロードソード／バックラー
エレメントワンド／無し
アイアンヘルム／アイアンメイル
アイアングリーブ／ガントレット
キュアリング／無し

レーナ
エレメントワンド／低級魔法書
無し／無し
サークレット／ローブ
皮の靴／皮の腕輪
無し／無し

となった。後はポーションなどを買い揃えた。
「よし、早速いこー」
ショウくんがそう言いみんなで町外れにある初心者用のダンジョ

ンに入ろうとした時。
「はなせー」
そんな声が遠くから聞こえた。
「あっちだいってみよう」
ユウくんはそう言いみんなそれに続いた。
そして崖についた時に2人が3人に捕まっていた。
「はなせー、だれかたすけろー」
どうやら声の主は2人のうちどちらかの物だった。
「奴隷商人かな？」
シンクくんはそう言った。
「ショウ、当てられるか？」
とユウくんはそう言い。
「当てられるかどうかわからないけどやってみる、レーナさんも手伝って」
そうショウくんは言った。
「分かった、3、2、1でやるよ」
私がそう言うとショウくんは頷いた。
「「3、2、1・・・［ダブルスペル：シューティングライト（Lv1）］」」
二人の呪文はピッタリで無事発動した。
拳代の光の玉が3人に当たる。そしてユウくんとシンクくんが突っ込んで行き3人を抑えた。

「何をしていた、素直に話してくれ」
とユウは問いた。するとリーダーだと思われるやつが口を開いた。
「仕方なかったんだ、仲間が何もやっていないのに犯人にされて・・・それで無罪ってわかる証拠を知ってるって言う奴がそこの2人を連れて来たら証拠をくれるって言うから。それで・・・」
「そいつは一体どんな奴だったの？」
私は聞いた。

「わかんねぇ、でも一つだけ知っている。やつは・・・・」
そこから先の言葉は出なかった。彼の腹部には鋭い何かが貫通していた。その正体はすぐにわかった。
ギャオォォォォ
そんな声と同時に出現したのはとあるゲームで言うバハムートだった。そのバハムートもどきは羽根に鋭い物が沢山ついていた。恐らく彼に刺さったのはそれだろう。
「ええい、皆戦うぞ」
ショウくんはそう言って残り2人の縄を解いた。
いきなり大ボス戦か、私は不安だった、でも全力で挑めば少なくとも命は助かるかもしれない。
「でもこれじゃ届かない、どうすれば・・・」
ユウは言った。
その直後ドラゴンのあの鋭いものが無数に飛んできて崖が崩れかけた。
「皆急いで村へ戻るよ」
そんな声が聞こえ皆一生懸命で走ったそして崖は崩れ何人かはギリギリ間に合い何人かは崖のしたに落ちた、私も一緒に。

途中人物紹介

名前性別／職業　Ｌｖ
右手武器／左手武器
右手補助武器／左手補助武器
頭／服
靴／腕
アクセサリー／その他
特殊能力

・・・ショウチーム・・・
バハムートもどきとの戦闘によりがけの下に落ちてしまったメンバー

ショウＭ／ヒーラー　Ｌｖ８
エレメントワンド／無し
短剣／無し
皮の帽子／ローブ
皮の靴／皮の腕輪
無し／無し
マジックコントロール

レーナＦ／見習い魔法士　Ｌｖ４
エレメントワンド／低級魔法書
無し／無し
サークレット／ローブ
皮の靴／皮の腕輪
無し／無し
マジックコントロール

ジン（刃雷真）Ｍ／ナイト　Ｌｖ１０
ミスリルソード／ヘビーシールド
ブロードソード／ショートソード
ミスリルヘルム／鉄の鎧（くろがね）
鉄の靴（くろがね）／ガントレット
アンク／ギルドマーク
護りの力

アオ（宮城葵）Ｆ／見習い弓師　Ｌｖ５
ショートボウ／木の矢（４８本）
無し／木の矢（１００本）
無し／アーチャーウェア
皮の靴／アーチャーグローブ
無し／ギルドマーク
精密射撃

アイクＭ／グラディエーター　Ｌｖ２６
クレイモア（両手剣）
グラディウス／バックラー
ミスリルヘルム／ヘビーアーマー
ミスリルグリーブ／ガントレット
力の指輪／聖騎士団の証
ダメージアップ、ディフェンスアップ

・・・かみにゃんチーム・・・
なんとか落ちるのを逃れる事が出来たチーム

かみにゃんＭ／サムライ　Ｌｖ８
落とした／落とした
短剣／短剣

アイアンヘルム／アイアンメイル
アイアングリーブ／ガントレット
無し／無し
集中

ユーキM／マジックナイト　Ｌｖ１８
ブロードソード／バックラー
エレメントワンド／無し
アイアンヘルム／アイアンメイル
アイアングリーブ／ガントレット
キュアリング／無し
体力自然回復

ジストＦ／見習い弓師　Ｌｖ１
ショートボウ／木の矢（５本）
無し／無し
無し／布の服
皮の靴／無し
無し／無し
精密射撃

・・・ソードチーム・・・
ショウ、かみにゃんとはまた違うところにいるチーム

ソードＭ／ナイト　Ｌｖ１３
ブロードソード／無し
無し／無し
無し／皮の服
皮の靴／皮の腕輪
無し／無し

護りの力

シールドM／ナイト　Lv12
ブロードソード／無し
無し／無し
無し／皮の服
皮の靴／皮の腕輪
無し／無し
護りの力

フィリアF／ディスペラー　Lv3
無し／無し
無し／無し
無し／皮の服
皮の靴／無し
無し／無し
無し

・・・コウチーム・・・
まだ出ていない、コウがリーダーのチーム。

コウ（服部光一）M／ダークナイト　Lv666
ソウルブレイカー／餐魂（テッコン）
邪神の劔（つるぎ）／邪竜の劔（つるぎ）
闇霊の兜／闇霊の鎧
闇霊のグリーブ／闇霊の籠手
闇霊の指輪／闇霊の誓
暗視、集中、盗聴

キンダ（金田　武士）M／スナイパーLv639

サイレントアサシン（７）／弾薬（３５個）
マシンガン（１０００）／マシンガン（１０００）
狙撃手の帽子／ハイディングマント

第六章　それぞれの歩

「お、落ちた？」
かみにゃんはそう言った。
「落ちた・・・よな？」
ユーキも同意した。
「はい、落ちましたね。アイクさんは無事でしょうか」
と少女が言う。

何故全く心配してないかと言うと、それは落ちた直後に遡る。

「うわぁぁぁぁ」
とショウたちはそう叫んでしたの森に落ちて行った。
「いってー、ケツうったー」
とか。
「もうダメだ。ジスト、俺はお星様になったと両親に伝えてくれ」
さらには、
「ここは誰ー？私はどこー？」
と明らかにギャグとしか言いようの無い物が聞こえる。
どうやら皆無事なようで安心した。
　しかし勿論バハムートもどきの事を忘れたわけではない。
やつがいたはずのところをみた時にはもう既に姿を消していた。

「いったいなんだったんだ？」
とかみにゃんは首を傾げながら言った。
とその時。
発砲音、しかしそれは幻聴。
かみにゃんが首を傾げる前に顔があったところを一発の銃弾が通過して行った。

「へ？」
かみにゃんはそう声を漏らし銃弾が飛んできたほうをみた。するとそのほうから2人の男が歩いてきた。
1人の手には剣と盾、そしてもう1人の手には一丁のライフルが握られていた。

「だ、だれだっ」
そうユーキは叫ぶ。帰ってきた声はいきなりな物だった。
「お前たちを殺す、降参するなら苦しまないように始末してやろう」

「あー、本当に痛かった。みんな生きてる？」
するとみんな無事だったようだ。どうやら森の木の枝に引っかかったりこの芝がクッションになったようだ。
「ふー、えーっと。君の名前はなんだったかな」
とクレイモアを持った青年は言う。
「あぁ、俺はショウ。それでこっちはレーナ」
とショウは言う。
「俺はアイクだ」
とクレイモアを持った青年は言う。
「俺たちはジン、それにアオだ」
と戦士の身なりをした青年。
「ど、どうかよろしくお願いします」
とアオは言う。
「とりあえず、これからどうするか？って思ったんだけど、この崖を登るのは無理があるからこの森を抜けようと思うけど。なにかある？」
とショウは聞くとみんな同意のようで顔を縦に振っている。

「よし、じゃぁしゅっぱーつ」
とショウは杖を掲げて歩き出した。
「おいこらまてぇー、作戦とか立てないのかよ。せめてポジションぐらい決めろ」
とジンはショウを止めた。
「私はアイクさんを前衛にしてショウさんを真ん中にそれを私とレーナさんで挟んで後ろをジンに任せるのがいいと思いますとアオは案をあげたので。
「よしっ、採用。ほらアイクとっととといけぇー」
とショウはアイクを押して出発した。

少々バランスが悪く緊張感の全く無いＰＴがここに結成される。さてさて、かみにゃん達はどうなっているのだろうか。

「殺すってなに言ってるんだ、お前達は何者だ」
ユーキは叫ぶ。
「ふんっ、どうせ。同じ依頼主に頼まれたとかそんなんだろう」
とかみにゃんは推測する。
「私はジストです二人とも頑張りましょう」
「あぁ、俺はかみにゃんでこっちはユーキだ」
とかみにゃんも自己紹介。
「戦うつもりか、ならいいだろう。俺はコウ、Ｌｖは６６６だそれでも戦うつもりか？」
「っな、６６６だって。どんだけだよ」
とユーキは剣を構えながら言う。
「やってやろうじゃないか、って。あぁあっぁぁぁ」
かみにゃんも剣を構えようよした時、ある事に気が付いた。
「剣落としたぁー・・・・まいっか、短剣二本買っておいてよかった」

と言い剣を構えた。
そして、コウと名乗る男が突進攻撃、ある程度迫ったところで中断そして剣圧を利用した剣風。普通はダメージはないがこいつの場合どうなるか分からない掠ってそこでＨＰ０なんてあり得る。

第七章　記憶を頼りに

さぁて、どうしたものか。
いきなり襲われた方思えば相手はチート級のＬｖを持っている、これで俺たちの冒険は終わりか？いやそんなことにしたくはない、だから俺たちは戦うんだ。

「［スキル：かまいたち（Ｌｖ５）］くらえぇぇ」
斬撃を剣圧に変換し風に乗せて斬を放つそれがかまいたち。
しかし、敵の一振りで消滅した。いや、正確には斬ったのだ。その空間ごと。
「くそっ、どうすりゃいいんだ」
ユーキが剣を横に振り叫んだ。
どうすればいいか、それはわかる。スキルを使わないしかない、現実世界の技しかやつには効かない。でも確証は無い。
「［スキル：ブレイクショット（Ｌｖ３）］」
ジストは矢を放ったがそれも効かなかった。それどころかジストはもう戦えない。矢の残りがないからだ。
「ジストさがってろ。くそっ、負けてたまるか」
俺は叫んだ。
「かみにゃん、何かいい方法はないか？」
ユーキは焦りながら聞いてきた。その間にも奴は少しずつ迫ってきている。
何だっけな、あの技。何か剣技があったはずだ、いつだったか。そうだあれは・・・始めてショウに会った時だ。

その時俺は小３だった。その時一度学校をサボった事があった。そしてゲーセンに行ってたんだそして裏で同い年ぐらいの女の子が

大きい男達に囲まれていて一目で恐喝の類だとわかった。
でも少し声を上げれば誰かが気づいてくれる、だから俺はなにもせずにしていた。だけどそいつはいつまでも行動を起こさなかった。
あとで聞いた事だけど怖くて声が出なかったらしい。俺はそのうち助けようと男達に飛びかかった。
相手は5人か、まずは数の暴力を防ぐために一番弱そうなヤツから行こう。
そして、俺は拳を握りしめてひょろひょろなやつを殴った。普通小学生が大の男相手に叶うはずも無いがかみにゃんは特別だった。両親とも運動神経抜群尚且つかみにゃんは他人に劣る事を嫌いそのために小さいときから体を異常なほど鍛えていた。
そのひょろひょろしたもやし男は1撃で気絶した。
「まず、ひとぉり」
続いて、少し小さめの奴が2人いたので2人同時に足払いをしてその2人は盛大にこけた、そこでリーダー格らしき奴には男の大切なOOOOを蹴り上げ悶絶しているうちに。
「逃げるぞっ」
そう言い女の子の手を取りその場から走って逃げた。

「あの、ありがとうございました。私は雅です、雪咲　雅です。あなたの名前は？」
と女の子が少し頬を赤らめながら言う。多分走って顔が熱くなったのだろう。
「さぁ、誰だろね～。正義の見方かもね～」
かみにゃんはそう言い手を後ろに振りながらその場を離れようとしたとき。
「桂峰・・・神紅・・・君？」
え？どうして俺の名前を知っている。俺がそれを聞こうと振り返ったら。
「さぁ、どうしてでしょうねえ～」

と言いどっかに行ってしまった。

帰る途中にとてもボロい道場があった。何となく覗いてみるとそこは剣道をやっていた。そのとき不意に後ろから肩にてを載せられた。俺はそのまま後ろを見ると。

「剣道やらないかっ？」

とそう言う３５歳くらいの男。

何で俺がそんな物をと言おうとしたときに。

「いやぁ、剣道ほど最高な物は無いさ。そもそも剣道は（以下略）」

５０分くらいたっただろうか。俺は挫折ししょうがなく剣道をやって見たすると思ったよりも面白くそのまま小学校卒業までやっていた。その道場でショウに出会い親友&良きライバルとして何度も戦い結果３６８勝３６７敗という大接戦により勝てた。

そして、中学は別々になり（小４から3年間一緒であった）道場でのみあうと思われたがショウは怪我をして剣道をやめてしまったのである。そして俺は中学卒業前に先生に剣技を教えてもらった。

そう、それは・・・

「それは・・・・、悠久蒼穹流。攻式弐之方　懸河之誓」

一振りの斬撃をダークナイトに撃つ。ヤツは今まで通り空間ごと切り捨てようとしたが斬撃だけは消えなかった。それがヤツに命中しＨＰを２／３程度まで減らしたところで後方にいたスナイパーが二つの銃を構え引き金を引く寸前に閃光弾のような光で目が眩んでいる間に奴らは消えていた。

「助かった・・・のか？」

俺がそうつぶやいた途端に後ろからぶたれた。

「おい、シンク。いまのなんだよ」

ユーキは聞いてきた。

「はぁ～、話さなきゃ・・だめだよな」

「当たり前だ」
「まず、この世界には魔法やらが存在している。そのことについてどう思う？」
俺が問いかけたすると。
「まぁ、ゲームの中なんだしあっても不思議じゃないと思うよ。まぁ、もしも現実にあったらびっくり仰天しすぎてしんじまうよ」
とユーキが言う。
「げぇむ？」
とジストが聞いてきて。
「気にしないでくれ」
とユーキ。
「まぁ、ゲームの中だから不思議って思ってるのは分かった。けど、そもそもゲームの中にはいること自体が不思議なんじゃ無いのか？」
あっとユーキは言って、かみにゃんはそのまま続けた。
「それが意味することは、現実世界に不思議があるって事だ。もし、ここがゲームの世界じゃ無かったとしても現実にはしっかりと不思議な物が存在している証拠となっている。その不思議な物はいろいろな呼び方がある。”魔法”、まあそれが一番まともかな。魔法は本来普通の人間には使えないんだ、なぜなら人間は普通魔法を使うのに必要な”マナ”と言う物が無いんだ。だけど、時々マナを持って生まれた人、ある日急に体にマナを宿した者、そこの空間に漂っているマナを使える者がいるんだ。そして、さっきの技はその魔法を利用した物で俺はある日急にのグループに入る」
と長い話が終わり。
「ｆｍ、全然わかんないが・・・現実世界にも魔法はあると言う事か」
とユーキが言う。って全然わかんねぇのかよ。そしてさっきから何かに寄りかかられていると思って見てみると頭をカクンカクンしながら寄りかかっているジストの姿があった。

一方その頃、ショウチームはというと？

「つかれたぁー」とか。

「だるーい」とか。

「ショウくん抱っこしてー」とレーナが言って（勿論ふざけてだが）、ショウは馬鹿正直にお姫様抱っこをしている。そしてレーナは、いいよー、とか、わるいよとか言ってるがショウはこれぐらい余裕だぁーと言っている。（実際はレーナは恥ずかしいのでおろして欲しいのだが）

1時間暗い森の道を進んだだろうか、あたりの風景が岩が多くなってきたところにでかい洞窟があってそこで中から気配がする。

「俺が様子を見てくる」

とアイクが言って中に入って行った。

第八章　永遠に・・・・

アイクが先に入り、その後にみんなが続く。ある程度まで進むと奥に何かに生物が動いてるのが見える。おれは直ぐに魔物だとわかり魔法を撃とうとした。がそれは阻まれた。

「ショウよおく中を見るんだ、こんなのに見つかったらすぐに死ぬぞ」

アイクのいう通りであった魔物自体は弱いがそれが何百、いや何千もいるのである。

「みんな、できる限り音を立てづにこの場から逃げるんだ」

そしてみんな少しずつ音を立てないように後ろへ引いて行く、その時。

ガチャ、と。さらに、どさっ。どうやらアオがそこに落ちていた物で足をつまずかせて倒れたのだ。と、呑気に推理していると。その・・・とにかく数えきれない数のモンスターが襲ってきた。

「レーナ、アオ逃げろ。ジン二人を頼む」

俺はそう言い、アイクと二人だけで敵を抑える事にした。

一方鑿はというと。

キーボードの上で指を走らせていた。

「なにがどうなってんだよ」
と呟いた。

その理由はというと例のゲームについて調べた結果オンラインゲームには普通運営が存在しており、サーバーという物もあるのだがそのゲームにはどちらも存在していなかった、プログラムをみてみると不可解なプログラムもいくつかあった。

結局鑿は運営の会社（どうせ偽物だと思いつつ）そこえいってみた。

そこは、東京湾のすぐそばにあるビルでものすごく寂れていて人の気配なんて微塵も感じられなかった。そして横には・・・

「なんでお前がいるんだよ」

横には斎藤　香菜がいた。斎藤　香菜というのは鑿のクラスメイトでそれ以上でもそれ以下でもない（あくまで鑿視点）。

「だって、鑿くんが外出してるのって珍しいから、ついっ！！」

「ついっ！！、じゃねぇ。お前はストーカーか？」

「うん、鑿くん専属ストーカーです」

・・・・・、忘れてた。こいつはストーカーだった。多分俺の部屋に後に2つくらい盗聴器がしかけてあるだろうし多分隠しカメラもあると思う。だが、鑿が妨害電波を出してそれらは無力化している。

「私にはストーキングスキルがデフォルトで備わってんの、だから鑿くんが外出したら第六感で、イタッ」

「お前の第六感は隠しカメラか？隠しカメラなのか？」

「そうともい。イタッ、だから痛いって。そんなに鑿くんにいじめられてると私Mに目覚めちゃうよ？」

駄目だ、こいつとどう接しても悪い方向にしか行かない。よし、スルーだ、スルースキルで華麗に無視してやろう。

結局無視し続けても抱きつかれたりとスルーしきれずに蹴り飛ばしてしまった事に後悔する事になった。

戻ってショウチーム

くっそ、いつまで立っても攻撃はやまない。

「アイク、逃げるぞ～」

と言い二人で走り出した。逃げる途中に何かがこの先でうごめいているのが分かった。そこまで走って行くと何かがうごめいていた。

「なんだあれ？」

「しらん、とにかく拾ってく」

とアイクはそれを拾ったすると。

「ガウッ」

とそ（・）れ（・）が叫んだ。

そう、そ（・）れ（・）は銀色の鱗を持った小さなドラゴン、恐らく白銀竜の子供だろう。その時。

『お兄さんたち、ありがとう。実は足が引っかかって抜けなかったのです（エッへん』

いや、抜けなかったっておいっ・・・・ってドラゴンがしゃべった？いや、この感覚、テレパシーか？多分アイクにもきこえてるんだろう。

『お礼に、何かしてあげるです。あ、今逃げていますね？それでは、外へ通じるワープホールがあちらにあるので案内するです』

そういうと、アイクの腕からするりと抜け出し先頭を飛んで入り組んだ道をなんの迷いもなく進んで行く。そして、途轍（とてつ）もない光で一瞬目が眩んだ。

『これが、ワープホールです。この中にはいれば無事外に出れます』

「本当か、やったなショウ」

「あぁ」

ダメだ、俺たちがこれを使って逃げても後から奴らも外にでてしまう。方法は一つだけだそれは・・・・。誰か一人がここに残りこの穴を封じる。それしかない。そして、その役を担(にな)うのは・・・・俺だ。

「アイク」

「ん？なんだ？」

とアイクが振り返った、そこで俺はこうつぶやきながらアイクをワープホールに突き落とした。

「Ｇｏｏｄｂｙｅ　ｆｏｒ　ｅｖｅｒｌａｓｔｉｎｇ」

そして俺は、一人ここに残り穴を封じて沢山の魔物に囲まれ、意識がなくなった。

伝説

昔、竜と人間が共存している世界が有った。しかし、ある日魔族が押し寄せ人間狩り、竜狩りが行われた。竜達は人間を守るために、そして、人間が戦うための準備をする時間を稼ぐために戦い、人間が来るのを信じて待った。しかし、人間達はいつまでたってもこなかった。

そう、人間達は・・・逃げたのだ。

来るはずのない、援軍を待って竜達は戦った。

魔族も竜に叶うはずはなかったが、魔族はバグラと言う、竜に似ているが非なる物を作り出した。

バグラの戦闘能力は圧倒的だった。次第に竜の数は次々と減少して行き、残り９匹にまでなってしまった。しかし竜には勝算があった。まだ竜王が戦闘に参加していなかったからだ。

竜王の参加により一気に竜の優勢となり魔族は去っていくが、人間達に絶望し竜達はいなくなってしまった。

それから、数百年後、再び魔族の襲来。しかし竜は姿を表さなかった。世界は確実に魔族に支配されて行った。しかし、１０人の勇者が現れた。ブレイバー、サムライ、パラディン、アルケミスト、ナイトメア、ストライカー、ディスペラー、ドラゴンテイマー、ディフェンダー、ダンサーの１０人だ。

その１０人が再び竜を説得し共に戦い魔族を追い払った。しかし、魔王だけは退かなかった。

人間達が１０人と交わした約束通り援護をしてくれれば勝つことができた、しかし人間達は再び恐怖にとらわれた。１０人は己の命

を捨て魔王と戦ったが追い払うだけで精一杯だった。竜達は今度こそ人間に失望し。会いに行ったモノすら帰ってこなかったと言う。

そして１０匹の竜、竜王　ジークフリード、地竜　ワーム、水竜　リヴァイアサン、　聖竜　ナーガ、氷竜　ヒュドラー、翼竜　リンドヴルム、炎竜　ワイバーン、風竜　　エクリシオン、魔竜　ディアボロス、雷竜　ライトはそれから見たモノはいないと言う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3503u/

World of Fantasy

2011年10月30日01時13分発行